新宮の民話と伝説（下）

新宮歩楽歩楽マップその５

熊野川と熊野川町

ヤタガラスの弥之助とガールフレンドメール

2014年３月 作成

N

↑ 十津川方面

← 中辺路・田辺方面

↑ 北山村方面

↑ 熊野・名古屋方面

十津川村
大森山
大平多山
甲森
富士根山
山在峠
小雲取山
七越峯
大日山
白見山
西ノ峯
子ノ泊山
那智山
大地山
女郎が峰
南牟婁郡
大烏帽子山
紀宝町
新宮市
新宮市街地
熊野灘
熊野本宮大社
熊野川
北山川
168
169
311
42
本宮町 大居
本宮町 本宮
本宮町 渡瀬
本宮町 耳打
本宮町 請川
本宮町 川湯
本宮町 田代
本宮町 小津荷
本宮町 高山
本宮町 大津荷
本宮町 津荷谷
熊野川町 篠尾
熊野川町 西敷屋
熊野川町 東敷屋
熊野川町 相須
熊野川町 四滝
熊野川町 九重
熊野川町 宮井
熊野川町 日足
熊野川町 田長
熊野川町 能城山本
熊野川町 椋井
熊野川町 赤木
熊野川町 西
熊野川町 上長井
熊野川町 東
熊野川町 大山
熊野川町 鎌塚
熊野川町 滝本
熊野川町 畝畑
十津川村 竹筒
熊野川町 玉置口
紀和町 木津呂
熊野川町 嶋津
紀和町 板屋
紀和町 小川口
紀和町 湯ノ口
紀和町 花井
紀和町 小船
紀和町 楊枝川
紀和町 和気
紀和町 小栗須
紀宝町 浅里
紀宝町 瀬原
紀宝町 鮒田
紀宝町 北桧杖
紀宝町 高岡
紀宝町 神内
相賀
高田
南檜杖

1 網代転ヒ見上石と鬼ノ手掛石

2 椋呂の仏くら

3 絹巻石・姫壺

（姫壺は四目山中腹）

4 花井の石夜月

5 薩摩守忠度の出生地の碑

6 楊枝薬師堂

7 かいも七嶋

8 志古の千人塚と桜地蔵、首無地蔵

（桜地蔵）

9 机石・机嶋

（机嶋）

10 御本明神社

11 滝本の藤綱の要害

12 弁慶力石

13 せんじかえり

14 飛鉢ヶ峰

15 七日巻

16 比丘尼ころび

17 骨嶋

18 釣鐘岩

19 昼嶋

20 弁慶の足跡（なめら石）

21 苞苴淵

＊出典を要約しています。

新宮の民話と伝説（下）

熊野川と熊野川町

平成26年3月　山﨑 泰 作成

❶ 網代転ヒ見上石と鬼ノ手掛石

本宮町小津荷の熊野川右岸にある大きな石にある鬼の伝説。あじろ、と呼ばれる鬼がこの辺りに住んでいた。その鬼を熊野権現が退治したという。すぐ下流にあるのは、その鬼が権現に捕えられるとき手を掛けたと伝えられる少し小さな石。この石に、爪で引っ掻いたようなすじがある。（山本殖生著『世界遺産〝川の参詣道〟熊野川の魅力』）

❷ 椋呂の仏くら

熊野川右岸の椋呂に、昔、地蔵さんそっくりの仏くらと呼ばれる岩が高所にあった。国道工事のため現在はなくなってしまったが、プロペラ船が通るとき乗客も運転手もこの場所で必ず手を合わせたという。この場所では不浄のことは行わず、石を持って帰ることもなかった。この岩の下に「ならべ岩」があり、そこから湧く清水で眼病が治るといわれていた。

また、椋呂の四目山の奥にある富士根山頂の四ｍ四方位の平地に高五十㎝幅十五㎝位の角塔があり、何か字も刻まれ、さらに石を積んだ「くど」で護摩を焚いた跡がある。その近くにお宮があり里人が正月に清掃し供物を捧げてお祭りをしていたという。

さらにこんな話もある。椋呂の深淵に生活苦のため赤子を投げ込んだ人がいた。それ以後この淵から毎夜赤子の泣き声がして、筏流しの人夫も気味が悪かった。そこで地蔵さんを建立したところ泣き声もなくなったという。この地蔵さんは今も残されているというが災害後確認できていない。（『熊野誌』第34号「熊野川町の伝説を尋ねて」上田幸一）

❸ 絹巻石・姫壺

熊野川左岸にある石。花の窟の祭に、朝廷より献じられる錦の幡が、洪水で破船し、この石に流れついたという。（『紀伊続風土記』第三巻）

この絹巻石のある一帯は九重地区相須の立ケ谷といわれる場所で、その谷の奥には数十丈の滝がある。その滝から上流約二百メートルほどのところに姫壺とよばれる淵がありそこに伝説が残っている。

昔、相須にあった一軒の旅人宿に一人の美しい娘がいた。美男の若者がこの娘のところに毎夜遊びに来るようになったが誰も知らなかった。両親はある夜、娘の姿が見えないことに気がついた。朝、見ると娘の草鞋が濡れている。夜更けてから娘の姿が消えるのを知った両親は娘の着物に白糸を通した針をつけておいて、翌朝ひそかにその糸をたどって行くと、この淵に着いた。そこで娘に問うても答えず、両親の注意も聞かず、数ヵ月後ついに行方不明となった。皆でさがしたところこの淵の辺に二足の草鞋を脱ぎ揃えているのを発見した。この淵に身を投げたのだろうとわかり、それ以来、この淵を姫壺・姫淵と呼ぶようになった。

また別の伝説もある。姫淵にうようよと泳ぐ鰻を大量にとって、男が帰ろうとしたとき、一天にわかに掻き曇り、雨傘のような大鰻が現れたので、びっくりして鰻をすべて捨てて逃げ帰ったとも伝えられている。

また、この姫壺の下流にある滝では、物を投げるときかけ声を掛けて投げないといけないとも言われている。（『熊野誌』第34号「熊野川町の伝説を尋ねて」上田幸一）

❹ 花井の百夜月

熊野川町宮井より北山川に入った熊野川町九重の対岸にある花井（熊野市紀和町）には次のような伝説がある。花井に貧しい家があった。あまりの貧しさに父は毎晩、他人の畑に行き、作物を盗み命をつないでいた。百夜に及んだとき子を連れていき、番をさせた。そのとき山上にある月を指し、だれも見ていなくても月が見ていると子が父に言うと、父親は悔悟し、ついに父子ともに北山川に身を投げた。これよりこの地を百夜月と言う。（『南牟婁郡誌』下巻）

花井や九重では和紙が有名だったが、これを伝えたのは岐阜県大垣市の高木十郎左ヱ門の次女の貞子姫（出家して貞流尼と号す）と伝えられている。関が原の戦いで西軍の高木氏は日頃信仰する熊野三山へ郎党をつけて貞子を逃れさせ、自らは堺から船でルソン島に渡ったという。最近ルソン島でその墓が見つかったとも。貞子姫は三山を巡拝したあと花井に隠棲し、ここで亡くなった（花井の円妙寺に墓がある）。その後、郎党の一人が本宮町高山に移り和紙を作り始めたという。なお、余談だが、高木氏の子孫は川崎市で高須組という運送業を営んでいるという。（『熊野誌』第34号「熊野川町の伝説を尋ねて」上田幸一）

❺ 薩摩守忠度の出生地の碑

宮井より少し下った熊野川右岸の音川にある。平忠度はここで生まれたと言われていて国道沿いに碑が建立されている。平忠盛は、熊野参詣のお供で来たとき別当の娘なる浜の女房に通い一男を設けたが、それが平忠度だという。（『東牟婁郡誌』上巻）

❻ 楊枝薬師堂

音川より少し下った左岸にある。京都の三十三間堂の棟木は、ここに生えていた柳を使ったものだと言われている。この伝説は次の浄瑠璃に作られることで全国に広まった。

伐り倒されかかった楊枝の薬師の柳を助けた縁で、柳の精の女と平太郎が契ってみどり丸が生まれる（初段）。院の頭痛平癒のため柳で三十三間堂が建立されることになり（二段）、母である柳の精が子供と別れ、平太郎親子の木遣り音頭で曳かれていく（第三段）。熊野の神が平太郎の信心を讃える（第四段）。平太郎が父の敵を討つ（第五段）。（三十三間堂平太郎縁起　祇園女御九重錦」、国書刊行会『叢書江戸文庫　豊竹座浄瑠璃集三』所収、宝暦十（一七六〇）年、大阪豊竹座で上演。文政四（一八二一）年に『三十三間堂棟由来』と改題され、第三段「平太郎住家より木遣音頭の段」が人形浄瑠璃で現代でもよく上演される。井原西鶴の『世間胸算用』「平太郎殿」も参照）

❼ かいも七嶋

楊枝薬師の対岸の志古にある灘峡ウォータージェット発着場の横にある熊野川右岸の岩。楊枝薬師の柳を伐採したとき、この岩の上で法螺貝を吹き、人夫を指揮したと言う。（『紀伊続風土記』第三巻）

❽ 志古の千人塚と桜地蔵、首無地蔵

熊野古道を志古より上ると千人塚（又は仙人塚）と呼ばれる平地に出る。松沢鉱山の奥から山の尾を伝って来て千人塚と相対する山の尾に「三人塚」といわれるところもあって、千人塚は源平の合戦で大勢の武者が戦死したところ、三人塚は最初の合戦のとき戦死した三人を葬ったところといわれている。

さらにここより小道を辿ると、桜地蔵に着く。昔、弘法大師がこの山道を越えたとき、ここで小憩してついてきた桜の杖をたてて置いたら、そこから芽が出て大木となったという。不思議なことに花が下向きに咲く、といわれている。地蔵さんには、天正十九（1591）年の文字が見え、地蔵の前の灯篭には天明五（1785）年、地蔵の後にある自然石に「南無阿弥陀仏」とあり宝暦十（1760）年と刻まれている。

またそこから少し行くと首無地蔵に着く。この地蔵にも伝説がある。熊野参詣に旅立った夫が三年たっても帰って来ないと、伊勢から母子がここまで来た。しかし日が暮れ、心労と空腹のため母はこの場所で息を引き取る。やがて狼が現れ、死んだ母を食おうとしたとき、娘は「母を食べないで。代わりに私を食べて」と懇願するが、狼は夢中になって母の死骸を食おうとした。そのとき天狗が現れ、狼を追い払ってくれた。天狗は自分の身を犠牲にして母の死骸を守ろうとした娘の心根を褒め、食べ物を与え、大津荷へ降りる道を教えた。朝になり、大津荷の村人の力を借り、母を葬った。それ以来、本宮で働いた娘はその金で母の供養のためこの場所に地蔵を建立した。その後、幾星霜、安政の頃、毎夜火の玉が大津荷の方角に飛ぶのを見て、人々は母が娘を思いそこへ行きたいのだろうと言い、「連れてやろうが、重いので首だけにしよう」と言って大津荷へ持って行ったという。今でも首だけ大津荷の田んぼの道の側にぽつんとあるという。

この地蔵の一番上に丸い石が乗りその下の四角の石に四方には梵字が刻まれている。どう見ても地蔵には見えないという。（『熊野誌』第34号「熊野川町の伝説を尋ねて」上田幸一）

❾ 机石・机嶋

三和大橋のすぐ下流、和気の上流の熊野川左岸にある岩。御本明神社の上流。専念上人が飛鉢ヶ峰よりここに来て、後白河法皇の御悩を祈念したという。このとき洪水が起こり、小口川に逆流したという。（山本殖生著『世界遺産〝川の参詣道〟熊野川の魅力』）

❿ 御本明神社

机石のすぐ下流、和気の上地のみ残る。古代以来の熊野あった。（山本殖生著『世界遺産〝川の参詣道〟熊野川の魅力』）

⓫ 滝本の藤綱の要害

熊野川町滝本は、熊野古道の要所、小口から鎌塚を抜けてさらに奥に入ったところ。源平の合戦の時、平維盛は熊野三山を巡拝したあと、那智の浜の宮の沖で入水したといわれている。しかし、入水せず山中に隠れたという伝説が熊野地方各地に多く残る。ここもその一つ。那智の色川から山を越え、この地へ逃れて住んだといわれている。

⓬ 弁慶力石

熊野川沿いに弁慶伝説が多く残るが、ここもその一つ。熊野川町田長の対岸、熊野川左岸にある。（山本殖生著『世界遺産〝川の参詣道〟熊野川の魅力』）

⓭ せんじかえり

熊野川左岸、白見の滝の対岸にある古道で飛鉢ヶ峰の麓にある。昔、後白河法皇が御悩みのとき、勅使が飛鉢ヶ峰の専念上人を訪れようとしたが、ついに行きつかず、この場所で帰ったためせんじかえり（宣旨帰り）と言う。訛ってでんじかえりとも。（『紀伊続風土記』第三巻）

⓮ 飛鉢ヶ峰

熊野川左岸、白見の滝の対岸の紀宝町小鹿にある山。保元平治の頃、専念上人がここに道場を創建、山上より鉄鉢を綱につけて川に吊り下げ、熊野参詣の人々に施物を乞っていたという。（『紀伊続風土記』第三巻）

⓯ 七日巻

国道169号の高田口トンネルを抜けたところの対岸、熊野川左岸の川岸がえぐれた場所。専念上人の鉢に、筏師がいたずらに古草鞋を入れたところ、七日間この淵から出られなかったといわれている。今でもこの淵は渦を巻いて、舟子はみな恐れているという。（『紀伊続風土記』第三巻）

⓰ 比丘尼ころび

熊野川左岸、七日巻の下流、骨嶋の上流にある岸壁で、上は絶壁で下は深淵、地元の人でも岩に手をかけないと通れない場所。比丘尼がここで遭難したといわれる。（山本殖生著『世界遺産〝川の参詣道〟熊野川の魅力』）

⓱ 骨嶋

熊野川左岸、真っ白い岩が砂川原に細長くある。昔、ここに鬼が住み、往来の人を悩ませたため、熊野権現がこれを包丁で切って退治した。その鬼の骨が残ったのが骨嶋であるという。（山本殖生著『世界遺産〝川の参詣道〟熊野川の魅力』）

⓲ 釣鐘岩

釣鐘のような岩。古くは、舟がこの岩の下で何艘も休憩できるほどだったが明治二十一年の大水害のときに岩が崩れ、現在の形になったという。（『新宮あれこれ』）

⓳ 昼嶋

浅里の下流にある熊野川の川中嶋。熊野権現が昼飯を食べたといわれている。また、平らな岩の上が碁盤上となっているためごばん嶋とも。（山本殖生著『世界遺産〝川の参詣道〟熊野川の魅力』）

⓴ 弁慶の足跡

熊野川左岸のなめら石といわれる岩にある窪み。この岩に弁慶は足を踏ん張って舟を対岸に押しやったという。現在、紀宝町の取水口。（山本殖生著『世界遺産〝川の参詣道〟熊野川の魅力』）

㉑ 苞苴淵

熊野川左岸、荘司家より少し下流の抉れた淵。荘司家はここで鮎を七十五取り、速玉大社に献ずるを古例とする。ために古くはこの淵の鮎は取れなかった。（『紀伊続風土記』第三巻）